掌編

もぐもぐ

土田清十郎

もぐもぐ

「ただいまぁー」
　妻が帰ってきた。
「あなたぁー。いるのー？」
　玄関からこちらに歩いてくる音が聞こえる。リビングの扉が開けられた。
「なんだ、いるじゃない」
　ソファーで新聞を読んでいた私は、顔を上げた。
「おかえり。今日は早いね」
「なんだか体調が悪くて、会社を早退してきたの」
　妻を見ると、確かにどことなく顔色が悪いような気もする。
「お腹が空いちゃった。食べるものある？」
　妻はそう言って、冷蔵庫のあるダイニングルームに駆けていった。ガサガサと、冷蔵庫を漁る音が聞こえてくる。
「昨日の残りがテーブルの上にあっただろ」
　私は新聞を読みながら答える。冷蔵庫の扉が閉まる音の直後、電子ジャーが開く音が聞こえてきた。新聞から顔を上げ、ダイニングルームを振り返る。
「体調は悪くても、腹は減るんだな」
「人間は食べる生き物よ」
　茶碗としゃもじを両手に持ち、妻はそう言った。茶碗にご飯をよそっていた妻は、途中でピタリと動きを止めると、なにやら食器棚をキョロキョロと見回した。食器棚から大皿を取り出すと、茶碗に入っていたご飯をそのまま大皿に移し変えた。妻は大皿のご飯をしばらく見つめると、再び電子ジャーに向かい、追加でご飯を盛り始めた。ご飯が山盛りになると、今度はテーブルの上に乗っていた鍋の蓋を開けた。鍋には、昨日の残りのシチューが入っていた。中身を確認した妻は、口元をかすかに上げると、大皿に持ったご飯の上からシチューをかけ始めた。
「おいおい、少し食べすぎじゃないか？」
　私は妻に声をかけた。すると妻はキッとこちらを睨んだ。――ような気がした。
「あなたはいいわよ。休みだからって、一日中ごろごろしてるんだから。こっちは朝から働いてるのよ。お腹だって空くわ」
　そう言われると、私は何も言えなくなってしまった。再び新聞を広げ、記事に目を落とす。後ろから聞こえてくる、妻の食事の音ばかりが気になって、なかなか記事に集中できない。
　ガツガツ、むしゃむしゃ、もぐもぐ。
　本当に体調不良なのか疑いたくなってくる。だがこれ以上何かを言うと、妻の機嫌が悪くなるのは目に見えている。触らぬ神に祟りなし。私はそのままにしておくことにした。
　新聞には、国の政策や経済事情が大きく掲載されていた。それらにざっと目を通す。
　ガツガツ、むしゃむしゃ、もぐもぐ。
　この辺りの記事は、ニュースでも見ることができるので流し読み程度で済ませた。新聞をめくる。

バタン、ガサガサ。冷蔵庫が開けられ、何かを漁る音。
新聞をめくると、今度は小さな記事がたくさん掲載されていた。地域密着型の記事だ。私はこのような記事を読むのが好きだった。記事を一つ一つ読んでいく。
カラカラ、ゴキュッゴキュッ。　ペットボトルの蓋を開け、中のお茶を勢いよく飲んでいる音。コップに移さずに飲んでいるのか……。
私の住んでいる町で起きた事件の記事を見つけた。ホームレスが幼稚園児を襲ったとある。ここの近所だ。
ビリリ、ガツガツ、むしゃむしゃ、もぐもぐ。　何かの包装を破り、再び食べる音。まだ食べるつもりなのか……。
記事の続きを読む。幼稚園児はホームレスに腕を咬みつかれたという。肉を食いちぎられる程の大怪我とある。いくらホームレスと言っても、そんなにも食べるものに困っていたのだろうか。生きている人間を襲うとは、まるでゾンビではないか。
ガツガツ、むしゃむしゃ、もぐもぐ。妻はまだ冷蔵庫を漁っているようだ。
ガツガツ、むしゃむしゃ、もぐもぐ。ガリガリ、ズルズル、ぺちゃぺちゃ。
私は新聞をテーブルに置き、立ち上がった。ダイニングルームに入ると、冷蔵庫の中に上半身を突っ込んでいる妻に言った。
「おい、いい加減にしないか」
妻は冷蔵庫からひょいと顔を出した。口の周りがほんのり赤く染まっている。私はギョッとした。妻が手に持っていたものは、ステーキ用の生肉だった。五百グラムで買ったはずの生肉は、すでに半分以上がなくなっていた。妻はどこか虚ろな表情で、口に入ったものを咀嚼し続けている。私は唖然となった。
「お前……大丈夫か？」
妻の顔は血色が悪く、血が通っていないように思えた。
「お腹が空くのよ」
そう言うと妻は、残りの生肉を口の中に押し込んだ。

おわり